

グリーン・エコー第56回演奏会

Колокола

ラフマニノフ 合唱交響曲「鐘」作品35 (日本語字幕あり)

RACHMANINOV / The Bells - choral symphony Op.35

Нарасаки

シュニトケ オラトリオ「長崎」作品19 (日本語字幕あり)

SCHNITTKE / Oratorio Nagasaki Op.19

格林カ 歌劇「ルスランとリュドミラ」序曲 (管弦楽作品)

GLINKA / Ruslan and Lyudmila Overture

指揮

井上道義

独唱

ソプラノ: ダリア・ダヴィードワ

アルト: アンナ・ヴィクトロワ

テノール: アレクサンドル・ボロディコ

バリトン: コンスタンティン・スチコーフ

合唱

グリーン・エコー

管弦楽

名古屋フィルハーモニー交響楽団

合唱指揮

荻野砂和子、河辺泰宏

制作

藤井知昭

2014 **5/24** (土) **愛知県芸術劇場コンサートホール**

pm4:15開場 pm5:00開演

S席:5,000円 / A席:4,000円 / B席:3,000円 / C席:2,000円 [全指定席]

(一部字幕の見えない席がございます)

●チケット取扱 [2月1日発売開始]

長円寺会館 / 052-231-0955

ローソンチケット / 0570-084-004 (Lコード: 45386)

愛知芸術文化センタープレイガイド / 052-972-0430

名古屋市文化振興事業団チケットガイド / 052-249-9387

●車椅子席があります(2,000円)

●託児を行っています(無料)

★車椅子席及び託児につきましては事前に長円寺会館にて予約が必要です。

主催: グリーン・エコー 後援: 愛知県、名古屋市、愛知芸術文化協会 (ANET)、愛知県合唱連盟

瓦礫の町に

明け暮れ鐘を鳴らすなら
それは心に響くだろう

— 米田栄作「鄙歌」より —

近代化の途上にあった革命前後のロシアにあって、西欧的な伝統音楽を基盤としながら民族的叙情性を遺憾なく発揮し、人々から愛される名曲を世に送り出したラフマニノフ。そして、スターリン独裁時代の終焉とともにロシア音楽界に登場し、思想統制の残る保守的な音楽界と闘いながら現代音楽史に名を残したシュニトケ。本公演は、ロシア音楽史上欠かすことのできない二人の作曲家、すなわちチャイコフスキーとショスタコヴィチのそれぞれの後継者を自認しながら、その偉大なる地平を超えようとした二人の作曲家に光を当てている。一人は革命を機に祖国を離れたロシア人であり、もう一人は、新たな時代の到来を期待しながらロシアで音楽を書き続けたユダヤ系ドイツ人だった。彼らの音楽には、西欧文化への憧れとともに、祖国が生んだ天才達への畏敬の念がはっきりと示されている。アメリカに渡ってピアニストとして成功したにも関わらず、白樺林のざわめきを聴けなくなって作曲への意欲を失ったというラフマニノフ。ロシアにおいてはドイツ人扱いされ、ドイツにおいてはユダヤ人扱いされ、つねに寄り添なき不安を感じながら、それでもロシア人として生きることを選んだシュニトケ。二人の心の葛藤から生まれた楽曲は、時代に翻弄される芸術家の真実を映し出していて興味が尽きない。

セルゲイ・ラフマニノフ
(Sergei Rachmaninov)

合唱交響曲『鐘』作品35 (1913年)

ロシア革命の直前、1913年の春、ローマに滞在していた時に執筆した交響的作品で、エドガー・アラン・ポーのロシア語訳詩が使われている。曲は四つの楽章から成り、それぞれの楽章は、個性的な鐘の音を人生の様々な段階に例えている。愛する人との巡り会いを表す銀のソリの鐘、婚礼の金の鐘、愛する人を失った悲しみを表す真鍮の鐘、悲嘆に暮れる弔いの鉄の鐘である。ラフマニノフの作品には、鐘をイメージした

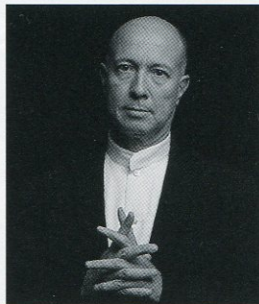
モチーフがしばしば使われている。作曲者自身の言葉によれば、「生涯を通じて、私は朗らかに鳴り響く鐘の音や、哀調を帯びた鐘の音の雰囲気や音楽に親しんできた。そういう鐘に対する愛着は、ロシア人の誰もが持っているのである。…もしも私が自作において人々の心と共鳴する鐘の響きを作り出していたとすれば、それは、人生の大半をモスクワの鐘の響きの中で送ってきたことが大きい。」という。

アルフレッド・シュニトケ
(Alfred Schnittke)

オラトリオ『長崎』作品19 (1958年)

1958年、モスクワ音楽院の卒業制作として作曲されたが、作曲家同盟から激しい批判を浴びた。ショスタコヴィチの推薦があってモスクワ放送交響楽団によって放送初演されたものの、その後、半世紀にわたってついに演奏されることはなかった。2006年、ケープ・フィルハーモニー管弦楽団のセルゲイ・ブルドゥコフが、ロンドンにある手稿スコアのコピーやモスクワにあった管弦楽のパート譜をもとにして復元し、ケープタウンで改めて再初演が行われた。

テキストには、シュニトケの担当教官だったゴルベフの助言で、ソヴィエトの詩人ソフロノフの詩に加えて、島崎藤村の『朝』と米田栄作の『川よ とわに美しく』のロシア語訳が使用された。最初、全6楽章として構想されたが、作曲途中で当局の指導が入り、第2楽章が抜かれ、フィナーレが書き換えられた。社会主義リアリズムを強いられ、前衛的な音楽が忌避される風潮の中、前衛的手法と伝統的手法とを混合した「多様主義」を確立した作曲者の個性がすぐにはっきりと現れている記念碑的作品であり、オーケストラの編成は最大規模である。作曲者自身、広島・長崎の原爆投下は見過ごすことのできない切実な出来事であったと回顧し、作品についても「現代の基準からするとかなり素朴な曲かもしれないが、本当に誠実に向き合った作品である。」と述べている。



Conductor

井上道義

INOUE, Michiyoshi

内ツアーを実施し、音楽・企画の両面で大きな成功を収めた。

2010年「平成22年京都市文化功労賞」、社団法人企業メセナ協議会「音もてなし賞」を受賞。2007年よりオーケストラ・アンサンブル金沢音楽監督、ならびに石川県立音楽堂アーティスト・アドバイザーに就任。ラ・フォル・ジュルネ金沢を含む多くの実験的企画を敢行し続けている。2014年4月に大阪フィルハーモニー交響楽団の首席指揮者に就任予定。自宅にアヒルを飼っている。 オフィシャルサイト <http://www.michiyoshi-inoue.com/>



Soprano ダリア・ダヴィードワ

Daria DAVYDOVA

1998年から音楽学校でピアノを学ぶ。その時から合唱のソリストとしてモスクワ音楽院、モスクワ国際パフォーマンス・アーツ・センター、チャイコフスキー記念大ホールの舞台で演奏を経験していた。その後モスクワ音楽院付属短大で、そして2010年からモスクワ音楽院声楽科で学び、ドイツ、ポーランド、オーストリア、チェコ、スロバキア、デンマーク、フィンランド、ポルトガル、スペイン、ウクライナでソロ・コンサートを行う。2012年からモスクワ音楽院付属歌劇場ソリスト。レパートリーは『ラ・ボエーム』『ムゼッタ』、ミミ、《皇帝の花嫁》マルファなどがある。

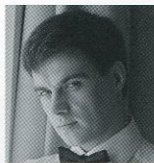


Alto アンナ・ヴィクトロワ

Anna VIKTOROVA

モスクワ生まれ。モスクワ音楽院とミラノ・スカラ座・アカデミーで学ぶ。レパートリーは、『アイダ』『アムネリス』、『オテロ』『エミリア』、『サムソンとデリラ』、『ボリス・ゴドゥノフ』、『マリナ・ムニーシェク』、『カヴァレリア・ルスティカーナ』、『サント・ウツァ』、『スベードの女王』、『ボリーナ』などがあり、『ヴェルディ』『レクイエム』やベートーヴェン『第九』なども歌っている。

モスクワ・ボリショイ劇場、ミラノ・スカラ座、ラトヴィア国立歌劇場、東京・NHKホール、アムステルダム・コンセルトヘボウ等の舞台で演奏してきた。



Tenor アレクサンドル・ボロディコ

Alexander BORODEYKO

2010年、モスクワ音楽院声楽部に入学。モスクワ音楽院付属歌劇場で『エフゲニー・オネーギン』のトリケ役でデビュー。現在はラフマニノフ『アレコ』の若いジプシー役なども歌っている。また、『ラ・ボエーム』ロドルフォ、『椿姫』アルフレド、『エフゲニー・オネーギン』レンスキーなどもレパートリーである。ほかにも様々なプロジェクトにゲスト・ソリストとして参加し、ヨーロッパ、アジアで行われるコンサートに出演する。

2010年にイタリアのリミニ市で行われたコンクールのソロ部門で第1位になった。



Baritone コンスタンティン・スチコフ

Konstantin SUCHKOV

トゥーラ生まれ。9歳から声楽を学び始めた。2006年にチャイコフスキー記念国立モスクワ音楽院付属アカデミーに入学し、卒業後モスクワ音楽院に入学。

2011/12年シーズンにチマローザのオペラ『みじめな劇場支配人』でDon Perizonio役を演じた。2013年にはプッチーニ『ラ・ボエーム』ショナール役、バイゼット『哲学者気取り』などに出演した。